

日本神経科学学会 2017 年度の活動報告

日本神経科学学会（大隅典子・東北大学大学院医学系研究科・osumi@med.tohoku.ac.jp）

Activity Report in 2017, The Japan Neuroscience Society

The Japan Neuroscience Society

(Noriko Osumi, Tohoku University School of Medicine, osumi@med.tohoku.ac.jp)

日本神経科学学会は、脳神経系に関する研究の推進を目的に1991年に設立された団体で、現在約6300名の会員で構成されています。今期より旧男女共同参画委員会を発展的に解消し、ダイバーシティ対応委員会が発足しました。今年度の大会開催中の同委員会の活動について報告致します。

1. 子育て中の研究者の学会参加支援

本学会における過去4年間の年次大会参加者の男女比を調べたところ、女性の割合が23.9→24.8→26.5%→27.0%とわずかずつですが、増加していました。特に20代の女性参加者がこの4年間で1.54倍に増えています。参加が増えている20代～30代女性が年次大会に参加しやすい環境を整備することは、女性が今後も研究活動を継続するために重要であると考えられます。本学会では2004年以来、継続して大会中の託児室を設営しており、今年のはべ22名の利用がありました。子供と一緒に使える休憩室も設置しています。今後、ポスター会場の一角における親子スペースの設置等を含め、このような取り組みを次年度以降も継続する予定です。

2. 大会中の男女共同参画委員会企画

ダイバーシティ対応委員会主催パネル討論会

「これからのダイバーシティを考える」

オーガナイザー：大隅 典子（東北大学大学院医学研究科）

幕張において開催された年次大会3日目の7月22日（土）ランチョンセミナー時にパネル討論会を企画しました。比較的大きな会場にて、100名分のお弁当を学会予算より提供し、和やかな雰囲気の中、まずオーガナイザーより企画の趣

旨説明ならびに女性研究者を取り巻く状況についてPPTによる10分間のプレゼンが行われました。その後、プレナリー・レクチャー講師の一人、米国ベイラーカレッジ医学部のHuda Yahya Zoghbi教授より話題提供をして頂きました。Zoghbi教授は精神疾患研究分野の著名な女性研究者であり、主要な雑誌の編集主幹等も務められておられます。これまでのご自身のキャリアを振り返り、パートナーや上司の理解が重要であること、また自身の時間の使い方等についてのアドバイスも頂きました。その後、学会長である伊佐正教授（京都大学大学院医学系研究科）より、今回のダイバーシティ対応委員会に改組した背景や、ご自身が男性研究者として奥様の協力のもとにキャリアを築いてこられたことと、これからの女性研究者の育成や、より広くダイバーシティに配慮したいこと等について述べられました。続いて、内藤智之准教授（大阪大学医学系研究科）から、若手男性研究者のキャリアパスにとっても厳しい現状について紹介があり、さらに企業の立場から渡辺裕美氏（田辺製薬株式会社）より種々の女性支援の仕組みについて披露頂きました。

この企画は英語で行われたため、外国人を含む、大学院生から教授まで幅広い年齢層の男女、約135名の参加がありました。男性研究者からも多くの質問があったことが印象的でした。Zoghbi教授には、ご帰国直前の時間帯にも関わらず本イベントご参加くださり、ロールモデルとしての姿を見せて頂けたことに感謝しています。

ダイバーシティ対応委員会としての活動はこれからになりますが、学会内の外国人会員数の把握等の基礎データの収集を行いつつ、来年の神戸大会における企画に役立てたいと考えています。

